俳句を読む

髙橋 信之

水煙発行所

俳句を読む

俳句雑誌「木炭」雑詠選後評

江苏工业学院图书馆
藏书章

高橋信之 著

髙橋信之（たかはし・のぶゆき）
昭和6年5月28日大阪に生まれる。
故川本臥風の「いたどり」を経て，
昭和58年「水煙」を創刊し，その
編集発行人，雑詠選者となる。
愛媛大学教授（ドイツ文学・比較
文学）。
著書―　句集水煙(昭和53年)，比
較俳句論序説(昭和55年)，句集硝
子体（昭和63年）その他

俳句を読む

著者　髙橋信之

発行者　水煙発行所
愛媛県伊予郡砥部町宮内二三二
☎六二―二七七七

印刷所　青葉図書
松山市小栗六丁目三ノ二三
☎四三―一一六五

平成四年四月二十九日刊

目次

創刊号〜第五十号……1
第五十一号〜第百号……51
水煙百号におもう……野上哲斉……101
松本　功……102
岡本亜蘇……103
跋……脇坂公司……105

俳句の選をするとき選者それぞれの考えや立場があることと思われますが、私の場合常に問題提起をいたしたいと思っています。「水煙」に発表された句は、作句活動の最終の評価がなされたものではなく、ここから出発する勉強のきっかけとなればと思っています。ここに発表された句について、選者である私の好みとは別に、大いに議論し、お互いに添削し、勉強していただきたいと思います。そして将来には、それぞれの句集として一大集成されることを願っています。

今月の問題提起は、より本質的に、ということです。「水煙」の創刊は、ことのはじまりということで、やはり、カオス（混沌）の状態にあると思います。しかしそれは、創造の原動力となるはずのもので、決して混乱や混雑といったものではありません。本質的な根源的なものが内在しております。そこを見失うことのないように心がけたいと思います。特に作句する場合に名利にとらわれると、本質的なものが見えなくなってしまいます。「夏汐集」は、そういったことを心がけて特にすぐれた句を選んでみましたが、もちろん私の主観、私の好みがはたらいていることを許していただかねばなりません。

夜の汐に素足濡らして灯に帰る　　志蝶

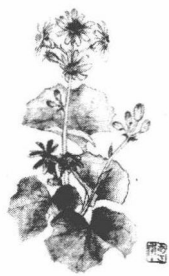
浮き袋肩に海まで運びし児　　〃

ともにすぐれた句です。日常的なものを否定しているわけではありませんが、俗世間とは関わりのない人間本来の美しい感情を読みとることができます。

静まれば大きい月のキャンプ場　　のりを

志蝶さんの一連の句は、愛大俳句会の夏の合宿をもとにしたときのものですが、のりを君の句は、教え子の小学生達とともにキャンプをしたときのものでしょう。海や山といった自然と人間との大きな関わりを感じさせ、私たちの心を根源的なものへと向かわせてくれます。

（昭和五十八年十月創刊号）



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

今年の夏の暑さは例年になく厳しく、だれもがいささか身にこたえたことと思われますが、それぞれ生活に工夫をこらして、一夏を無事に過ごされたことと思います。

夏負けや白いページが無数につづき　清紀
夏やせを手早く拭う湯上がりや　満樹

これらの句が実感をもって迫ってくる夏でした。

夏が暑ければ、それだけに涼しい秋が楽しみです。季節の移り変りにも敏感に反応を示します。それは、何よりも生活の場で顕著に現れます。

机拭く重ねしもののみな晩夏　あさ子

季節の移り変りのなかで展開してゆく生活の充実をうまく表現しています。

新涼の峠恋人ら闊歩　和明
新涼の手のひらに受く化粧水　鈴子

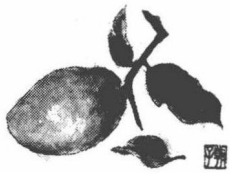
夏から秋に入ったばかりの涼しさも新鮮で、私たちの心を打つものです。

さやけさの中へ起き出し四肢があり　正子
さわやかにカーテン抜ける風の束　美帆

秋のさわやかさは、私たちの生活のなかでも格別嬉しく、心待ちにしてきたものです。

今月の問題提起は、「生活と俳句」となりました。私が取りあげた「生活」は、消費生活といったものよりは、創造や生産活動にしっかりと根をおろしているものです。芸術や文化の活動は、やはり作者個人の心の深くへどんどん入ってゆくものなので、それだけに社会とのつながりが希薄になりがちです。それを補うために、個人の生活が生産活動にしっかりと根ざしていなければならないと思います。

（昭和五十八年十一月号）



芸術や文学の分野では、やはり、個性が重んじられ、独創的な人間を育てあげていくのが本筋だと思います。しかし、現実には画一的な方向へ流されていきがちで実に残念なことと思います。

今月号の投句のなかには、こういった画一性に流されない、独自な句を多く見つけだすことができ嬉しく思いました。そのなかでも良悟君の句が特に目立ちました。

青年の死のごと昼をまんじゅさげ　　良悟

曼珠沙華は、自己主張の強い、秋を個性的に色どる花ですが、青年の死にも同じものが感じられます。自己主張も直接的に他人にぶつけるのではなく、うまく詩に俳句に昇華させると実に個性的となります。

今月号には、曼珠沙華をうたった佳句が多く見られます。

曼珠沙華めいめい紅き自己主張　　満樹

母と佇つ曼珠沙華を中にして　　照子

曼珠沙華おのが焔に焼かれをり　　弐子

独創的だといわれるものには、無理をしているのが多いようですが、これは、長続きすることもできず、生命力の薄い、要するに本物ではなく、まやかし物となってしまいます。次の句などは、それとは違って無理がなく、しかも実に個性的です。おそらく独創的なものをねらって作られたのではなく、自然に生まれてきたのが成功したのでしょう。

コスモスの群れて空地に歌となる　　恵吾

このような句がいくつも寄せられて、「水煙」誌上をにぎわし、私たちを楽しませてくれることを願っています。

（昭和五十八年十二月号）

謹賀新年

私たちの俳誌「水煙」も第二年目を迎えることになりました。誌友の皆さんの御健吟をお祈りします。

毎号の表紙絵を誌友の恵吾さんにお願いして、発行所の周辺の風物を御紹介していただいていますが、ご苦労の多いことと思い、いつも感謝しています。今月号は、砥部の焼き物と蜜柑を描いていただきました。

発行所を砥部に置き、毎月の例会を砥部で行うということは、それなりの意味のあることと思います。砥部焼と蜜柑の町ということで生産的でもあり、また何よりも豊かな自然に恵まれているので俳句に相応しい町だと思っています。

陶の片光る秋陽に育つかに　　鷹王

静かな砥部の風景を写生した句ですが、太陽の光りあふれるなかでの生産的で生きいきした情景をうまくとらえております。

稲架つづく先に海見え島光る　　菖園

菖園さんは、伊予市の奥の大平に住んでいて、毎日海の見える所を通って愛媛大学の研究室へ通っています。大平も砥部と同じような郊外にあります。臥風先生がかつて菖園さんの新築祝いの句会で、次の句を読まれたのを思い出しました。

山ふところの秋陽にこっぽり包まれ新居　　臥風

清紀君も野村高校に勤めていて私たちと同じような環境のなかで生活しており、毎月の投句で、そのことを知って楽しみにしています。

霧はれて人いきいきと動きだす　　清紀

無駄な言葉がなく、一日の生活がはじまる午前の緊張感が快く読み手に伝わってくる佳句です。

（昭和五十九年一月号）

「水煙」生みの親である川本臥風先生の一周忌は、十二月六日でしたが、五日おくれの臥風忌句会を、水煙例会をかねて松山南梅本の臥風旧居で行いました。川本征矢さん御夫妻や高木和蕾さんの御出席を得て臥風先生生前そのままの形の句会であったのがとても嬉しく思いました。そこで披露された句も、生前の先生を偲ばせるものが多く、それでいて決して、甘い感傷にひたったり、たんなる挨拶の句でなかったのも嬉しく思いました。

木枯に押され飛ぶ雲と忌へ急ぐ　和蕾
臥風忌の寒さ寒さへ向くばかり　杞三花
臥風忌の雲遠くなる昼の駅　莎逍
臥風忌の伊予柑重き実を枝に　昭夫
臥風忌や刈田の風に吹かれ来る　恵吾
鵜が二羽来ていて臥風忌音もせず　正子

良悟君が「樹心忌」という新しい季語を作ってくれました。「樹心」は、臥風先生の第一句集の書名です。

樹心忌の風や時の移ろふより遠し　良悟

「臥風忌」、「樹心忌」といった新しい季語が、今ここに生まれましたが、歳月を重ねていくうちに、きっとりっぱな臥風忌俳句が育っていくことと思います。

今月の句で特に印象に残ったものに、リアリズムの俳句があります。

坂を下りまた坂があり黄落期　あさ子
稲干さるその切株を田に残し　恵吾
揺れ動くコスモスしかと地を掴み　照子

リアリズムの良さは、作者の観察する眼の確かさによるものと思いますが、それを支えているのは、作者の日常生活の確かな歩みに他なりません。そして読者の心を最も引きつけるのは、リアリズム俳句にかぎりませんが、日常生活を営みつづける作者の心の姿、心境といったところだと思います。

風が流れ時がとまった秋の空　美帆

この句は、リアリズムを基調としていますが、作者の心の新鮮な驚き、発見といったことを充分に読みとることができます。「時がとまった」と口語表現を使ったことも成功しており、新鮮な句となりました。

（昭和五十九年二月号）

健康と日記始めの一行に　　とら子

「健康」であることが、私達の生活における最大の関心事であり、誰もが願っていることと思いますが、これは、よく言われる「無事是大事」という考えに通じることでもありましょう。一年の始めに健康であること、これ以上の幸せはないものと思います。

甘がらい南瓜食らいて冬至の昼　　恵吾

たぎる湯の白湯のうましや雪降る夜　　登司子

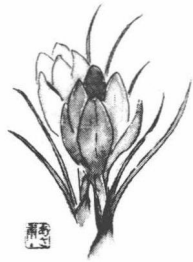
このような食生活を楽しく過ごせるのも、健康であるからだと思います。風邪の季節には特に健康に気を付けて、春の季節の訪れを待ちたいものです。

春は、若者の季節でもあり、若者の健康で生きいきとした活動が期待されます。誰もが生命の躍動を待ち望んでいます。「水煙」は、若い俳誌ということで二・三十代の青年が中軸となっている雑誌ですが、毎月の水煙作品に寄せられる十代の大学生や高校生の作品が楽しみです。

伝説の冬の星座に手を伸ばす　　佐知子

作者は、松山西高の生徒で、清水正さんの教え子です。一月号の巻頭抄でも、「草の実をのせてみる手に暖かさ」という句を紹介しました。その他にも福山女子高の生徒で、遠野あさ子さんの教え子の佐藤美帆さんの句「さわやかにカーテン抜ける風の束」と「風が流れ時がとまった秋の空」を、巻頭抄に紹介しました。これらの句は、いずれも、新鮮で、生きいきとしており、読み手の心を楽しくさせてくれます。これらの若い人達が次第に成長し、活躍してくれるものと、「水煙」の今後を楽しみにしています。

（昭和五十九年三月号）



過ぎ去った夏の暑さにおとらず、この冬の寒さは例年になく厳しく、また全国的な大雪のために多くの方がたが被害を受けたことと思います。心からお見舞い申し上げます。こういった自然の災害にもめげず、誌友の皆さんがたくましく自然をうたいあげているのをみて頼もしく思いました。

石よりも力をひめて寒の水　清紀

寒の厳しさには、だれもが身にこたえるものですが、それだけに、生気に充ちた自然の力を感じさせます。この句は、そこをうまく表現しています。

寒の句といえば、

寒浄し床に白磁の観世音　臥風

を、すぐに思い出します。どこにでもある砥部焼の観世音をうたったものですが、「浄しの美」といった寒の本質を、ずばり「寒浄し」と表現した素晴らしい句です。

雪つもる音なき音の四囲に充つ　弐子

雪積みてみ空の青さ底ぬけに　(渡)泰子

この二句は、雪の音なき音、雪の色なき色をうたって、雪の本質、自然の本質に迫っております。単なる写生に終っていない佳句です。

地の起伏まろやかに雪積みにけり　健市

雪の日の湯にまるまると赤ん坊　正子

厳しい雪にも、生活のなかでのまろやかさを発見することがあり、心のはずむ思い、あるいは心の安らぐ思いがして嬉しいものです。

今月は、雪の句に佳句が多くありました。

夜の雪となりゆくコーヒー沸かす匂い　あさ子

街燈に雪は光らずさらさらと　良子

心はずむ窓外雪の自由な舞い　美帆

子の砂場埋めつくして牡丹雪　敏郎

(昭和五十九年四月号)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

砥部出身の名優井上正夫を偲ぶ如月忌俳句会が、二月四日砥部の公民館で開かれ、私も、

正夫忌の夜空黒ぐろ山へ落つ
正夫忌の大き黙なり夜の山河

といった句を作りました。

正夫忌の正夫の遺墨見て倦まず　　時子

作品七句に御紹介致しました小坂時子さんは、井上正夫の実弟小坂起二郎さんの御夫人で、割烹「真砂家」の当主は、その息子さんです。

如月忌俳句会は、正夫没年の昭和二十五年に始まり、今年で三十五回を数えております。鷹王さん、天洋さんの御努力によるもので、一度も跡切れることなく毎年続けられているのは、驚くべきことです。持続は、力であるとよく言われますが、私たちの雑誌も是非学びたいと思っております。「水煙」が細く長く続くことを願っております。

力は、何よりも生命力といった形をとって現われてきます。生命力は、持続力でもありますが、誕生の新鮮さ、生きのよさが大切です。「水煙」の投句者数は、当初予測していたよりも多く、その中には、水煙創刊を契機として作句を始められた誌友も多数いて頼もしい限りです。

陽炎を置き去る貨車もかぎろえる　　直之
風花のひかりてのちを見失う　　照子

直之さんも、照子さんも、俳句雑誌への投句は「水煙」が初めてという全くの新人ですが、すでに高い水準の句を発表しております。これらの句は、どこへ出しても恥ずかしくないものと思います。その他の

饒舌の飛び交う春の水鏡　　令子
雪積もり城も民族も真白なる　　登司子
月冴えて凍てつくような澄んだ空　　一恵
かまくらをつくる子の目は輝いて　　裕子
庇より雪の落つ音闇深し　　純
空を渦巻く二月の雪の白く深く　　美和

といった句の作者たちも、「水煙」が初めてということで、新鮮な句を送ってくれました。

（昭和五十九年五月号）

第一回水煙賞を、熊本良悟君と遠部あさ子さんに差し上げることに決定しました。お二人とも、創刊以来毎号「水煙」誌上でよく活躍してくれました。巻頭抄では

青年の死のごと昼をまんじゅさげ　良悟
机拭く重ねしもののみな晩夏　あさ子

今月の投句では

パンジーの花びら紙幣のように折る　良悟
春の雲かたまり別れゆく生徒らに　あさ子

といった句を詠んでくれました。お二人の俳句のよさは、職場や家庭での充実した生活が充分読みとれることで、俳句のたゆまぬ精進にも、いつも感心しております。今後も俳句の精進に励まれ、いつかは自分の俳句を完成していただけるものと思っています。

春どっと来てしばし心のうつろなる　恵吾

今年の冬は例年になく厳しく、その上ながながと続きましたが、春の季節は、間違いなくやってきました。しかし、あまりにも急なことで、一度にどっとやってきましたので、だれもがいささかの戸惑いや「しばし心のうつろ」なる状態にあったことと思います。それでも、それぞれに充実した生活もあって、今月の投句のなかには佳句が多くありました。

限りある時なり桜花門に満つ　金四郎

時間を限り、空間を限って、そのなかでの満たされた世界をうまく表現しており、程度の高い句です。俳句は、限定された十七字のなかでの充実や自由を詠ってゆくものなので、この句は、その典型といってよいと思います。「桜花」という言葉は、今までの俳句では馴染のうすい表現ですが、「桜」や「花」といった季語に変える必要は全くありません。

椿散り重なるそれも地の厚み　正子
椿が床に落ち夜をそのままに　優子

落椿を詠ったものですが、一方は、「地」という空間を、片方は、「夜」という時間を限定しており、そのなかでの焦点がよく絞られていて、深い心境の句となりました。

（昭和五十九年六月号）

木々芽吹き花開く頃を終え、新緑の季節となりました。今月の投句を見ていますと、そのところの移り変りが手に取るように分り、とても楽しく、こちらの心も生きいきしてきました。

いちょう芽吹き空の青さをはるかにす　　あさ子

といった芽吹きの頃から

犇めきて花の蕾の満を持す　　健市
山門の限る空間桜が占め　　征矢
莫蓙と莫蓙重なりあって夕桜　　令子

といった花の頃を終え

新樹匂い鐘の響きの全山に　　一誠
ゴンドラぐらり揺れて若葉の谷もゆれ　　良子
樹々の緑濃くなり我も手に力　　純

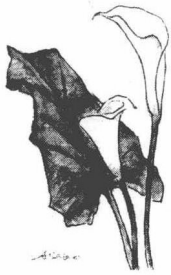
といった新緑の季節を迎えたことが、誌友の皆さんの句を読むことによって手に取るように見えてきます。時の流れや野山の拡がりに心あそばせ、多くの人たちと、その生活をともに体験することができます。

こういった季節の移り変りに心引かれるのは、何といっても、生命の誕生とその成長の姿を、そこに生きいきと感じ取ることができるからだと思います。そして、この生命に浸ってしまうと、私たちは全く無心になってしまい、充実した生活の一刻を過ごすことができます。そこのところを照子さんは

新緑にまるごと浸る無心のとき

と、実にうまく、すぱっと表現してくれました。

（昭和五十九年七月号）



無季の句を否定するわけではありませんが、本当によい句には、自然に季が入ってくるものだと考えています。ただ、季語というものを、歳時記のなかから形式的に取りだし、自分の句のなかに無感動に取り入れるべきではないと思います。一句に使われている季語が、いわゆる「感じられた季」であるかどうか、が重要なことでしょう。

青葉木菟過去ありありとよみがえる　　あさ子

この句を読んでいますと、すぐに川本臥風先生の

蝶飛べりむかしの時間かも知れず

という句を思いだし、「感じられた季」が、その句のリアリティを強めいかに重要な役割を担っているかを教えられます。「青葉木菟」や「蝶」といった言葉が形式的な季語ではなく、作り手の心深くに「感じられた季」であり、「青葉木菟」や「蝶」といった対象自体の本質に迫っております。このことはまた、作り手の「精神の深まり」ということでもあります。もちろん、あさ子さんの句と臥風先生の句とでは、生活体験や宗教体験の差による深まりの違いというものもありますが、いずれの句も、「過去」や「むかし」をめぐっての「心の内容」には少しも触れておらずに、作り手の「精神の深まり」とか、「心境」とかが、リアルに感動的に読み手に伝わってくる素晴らしい句です。

初夏のとびらつぎつぎ開きゆく　　清紀

母の日のエプロンかけしまま終る　　とら子

若葉風わが生かされし空間に　　照子

といった一連の句にも「感じられた季」のリアリティがあって、作り手の「心境」が読み手に伝わってくる佳句です。これもおそらく、日常の精進の結果に他ならないと思います。

（昭和五十九年八月号）

詩や芸術の世界では、独創性（俳句では主体性）が重んじられますが、要は、いかに自分自身を表現しうるかにかかっており、社会や時代に振りまわされることのない自分自身の主体性を確立することが重要だと思われます。それには、自分の精神を常に自由で束縛のない状態に置いていなければならないでしょう。

月姿ととのえ梅雨明けの宣言　　金四郎
あじさいの静かな宇宙自由な季節　　良悟

自由なうたい方をしていながら作り手自身の心の位置がよく定まっており、こういった句を独創性（主体性）のある句だといってよいと思います。「水煙」は、今月号で通巻第十二号となり、丸一年の歴史を歩んできましたが、金四郎・良悟君等多くの誌友の御努力によってユニークな作品が育っており、実に嬉しいことです。このユニークなものをお互いの精進によって更に大きく育てあげたいものだと思っております。

今月は、梅雨時期の生命を代表する「虫」をうたった佳句が多く寄せられました。

てでむしの誤算道路に日がさしぬ　　恵吾
鍬形虫をささげ持つ子のひとみ光る　　紀子
源氏蛍児の腕つたい服を這う　　志蝶

植物では、向日葵や紫陽花が季語の生命をうたった「花」を代表しておりました。

向日葵や陽はさんさんと地に蓄り　　一秀
紫陽花を支うる茎の生命をわれも　　草二

「水煙」に御投句いただいた句のなかには、出産や子育てをうたったものも多く、これもまた、すばらしい生命賛歌で、私達の人生を生きいきしたものにしてくれます。

新緑目にしむ午後女児産まる　　寿子
這いはじめし子に展げ敷く花莫蓙　　正子

（昭和五十九年九月号）

「水煙」の投句者には、創刊とともに作句を始められた方が多くいますが、一方では、長い作句経歴をお持ちの方もいて、私たちの雑誌を多彩で豊かなものにしております。

萩吹かる僧も吹かれて向こうより　　一秀

一秀さんは、故川本臥風先生の御指導を受けられた方で、この句の特長は、表現が平明で無理のないことであり、俗世間から一歩抜け出た出世間の澄んだ世界が快く読み手に伝わってきます。作り手の心が大自然、大宇宙に快く遊んでいるのでしょう。

夜店の灯後の闇を照らし得ず　　天洋

天洋さんは、県の俳句大会の選者もなされた砥部の方で、「水煙」が砥部から出されるということで御投句いただきました。県俳壇の長老の方々の参加は、若い俳誌で、若い者たちが集まって運営している「水煙」にとって実に頼りになる力だと思います。

夕立の上がりて橋の光りけり　　尚

尚君は、愛大医学部の学生で、この句は、良悟君等の愛大俳句会の砥部合宿に参加したときのもので、一秀さんの「萩吹かる」の句におとらず、全く邪心のない佳句です。

蚊を叩くために手をうつ坊の内　　公司

公司君は、愛大俳句会の会友として合宿に協力、参加してくれました。この句はそのときのもので公司君らしい句です。日常の生活の中にいて、その生活から抜け出ているところが面白いと言えます。「蚊を叩く」行為は全く日常的なものですが、作者は、「手をうつ」と表現することによって、「蚊を叩く」とは別のところも見ています。「坊の内」もよくきいた表現です。

終点は起点に変わる夏合宿　　浩司
白壁が西日をあびて浮き上がる　　英樹
噴水の空に輝き水面打つ　　章

作者は、愛大俳句会の学生たちで、これらの句も合宿に参加したときのもので、砥部永代寺での一泊二日の精進の産物です。

夏雲が幾層もある峠の空　　菖園

菖園さんは、教師の一人として学生の合宿に参加、充実した句を多く作ってくれました。私たちの俳誌「水煙」は、こうした多彩な誌友の多彩な俳句によって支えられており、第二年目の一歩を力強く踏み出すことができました。

（昭和五十九年十月号）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com